

試みたことなどは、いざれも實證の作品に頼むことによつて讀者の理解や記憶を具體的に鮮明ならしめようとする著者の苦心の「日本漢文學通史」へることのないやうにと、小心なほどまでに筆を用いた。しかもなほ意外の讀みやすさをも知れぬ。大方の著者と高教とを乞ふものである。

本書の執筆にもまた、師と高教と伊達とを感へた文學博士加藤虎之氣先生、種訂に際して有益な助言をおしめられた大隈文雄口野氏、史料の配製撮影等に便宜を與へられた立正大學圖書館・武蔵大學圖書館、印刷

序 目次

大和時代(宮廷文學時代).....一

一、概観.....四

二、推古朝の文章.....五

(1) 概説.....五

(2) 例文解説.....五

伊豫國湯岡側碑文.....九

十七條憲法.....九

法隆寺金堂藥師佛光背銘.....三

三、近江奈良朝の詩文.....三

(1) 概説.....三

代表的詩人 懷風藻の編纂と萬葉集の漢詩文 史書の修撰 佛教の興隆と漢文學.....三

日本漢文學通史

目次

平安鎌倉時代(貴族文學時代).....三

一、概観.....三

二、詩人の輩出と詩文集の編纂 附詩論文話.....三

(1) 概説.....三

弘仁前後の詩人 延喜前後の詩人 天曆以後の詩人 院政期の詩人 總集の勅撰 別集及び總集の私撰 本期の詩風 詩論文話.....六

(2) 例文解説.....六

春日遊獵日暮宿江頭亭子(嵯峨天皇).....九

後夜聞佛法僧鳥(釋空海).....九

不出門(菅原道真).....五

目次.....五

字訓詩(清原真友)……………五

離合詩(橘在列)……………五

廻文詩(橘在列)……………五

荔枝賦並序(源兼明)……………五

池亭記(慶滋保胤)……………六

吾妻鏡……………六

三、佛敎文學……………七

(1) 概説……………七

(2) 例文解説……………七

供養自筆法華經願文(源兼明)……………七

吉野室町安土桃山時代(僧侶文學時代)……………七

一、概観……………七

二、五山の文學……………七

(1) 概説……………七

(2) 例文解説……………七

雨中對花(釋周信義堂)……………七

應制賦三山(釋中津絶海)……………七

呈湛然靜者併謝畫(釋中津絶海)……………八

三、武將の風雅……………八

(1) 概説……………八

(2) 例文解説……………八

海南行(細川賴之)……………八

朝鮮之役載一梅而歸裁之後園詩以記(伊達政宗)……………八

江戸時代(儒者文學時代)……………八

一、概観……………八

二、詩文の盛行……………八

(1) 概説……………八

初期の詩文 古文辭派の興起 反古文辭派の擡頭 化政度の文人 幕末の詩文……………八

(2) 例文解説……………八

新居(釋元政)……………八

蒙古來(賴山陽)……………八

東坡赤壁圖(市河寬齋)……………八

冬夜讀書(菅茶山)……………八

花朝下澱江(藤井竹外)……………八

目次……………七

峡中紀行(荻生徂徠)……………一三  
 梅谿遊記(齋藤拙堂)……………一五  
 三、史書の修撰……………一八  
 (1) 概説……………二八  
   大日本史 本朝通鑑 野史 日本外史と日本政記……………一〇九  
 (2) 例文解説……………一三  
   楠正成贊(安積澹泊)……………一三  
   楠氏論(頼山陽)……………一三  
 四、狂詩狂文の流行……………一七  
 (1) 概説……………一七  
 (2) 例文解説……………一九  
   出精行(寢惚先生)……………一九  
   鈴鹿(滅方海)……………二〇  
   檀那山人藝舍集序(四方山人)……………二一  
 明治大正時代……………二一  
 一、概観……………二一  
 二、詩文の大勢……………二五

# 日本文学史

戸田浩晴著

(1) 概説……………二五  
   詩社と詩人 文會と文章家……………二五  
 (2) 例文解説……………二五  
   風雨踰函嶺(森春濤)……………二五  
   華嚴瀑布歌(小野湖山)……………二六  
   長安今昔(竹添井井)……………二四  
   送清國公使黎純齋序(重野成齋)……………二四

## 附 参考書解説

漢文學の發見と日本文學の發見とは區別して考へなければならぬ。日本文學の發見は、聖徳太子の時にさるへきてあらう。ただしかし、太子の伊豫國湯岡岡碑の文や十七條憲法は、成るの日に成つたものではない。その思想もその文辭も、漢學及び佛敎の渡來によつて得られたか一大成果であつたのである。この意味に於て、日本の漢文學を語るには、漢學及び佛敎の渡來とそれらの發展の歴史とをなほざりにはすることはできない。

日本書紀によると、應神天皇の十五年(西暦二八四年)百濟國の使者として來朝した阿直岐が詠く經典を讀んだので、太子菟道稚郎子は阿直岐を帥として之を學ぶ給ひ、更に翌年阿直岐の推薦によつて來朝した王仁によつて諸の典籍を習ひ給うた。古事記によれば、王仁のもたらした典籍は論語十卷と千字文一巻とであつたといふ。漢字や漢籍の渡來といふ事實は更に古い時代にあつたらうと思はれるが、それが日本文化に直接影響したといふ點からみれば、やはり記・紀の所傳を以て漢學及び漢籍の

東風凍結紅虹空霽  
 高臺峻崇桐楓菱隆  
 鯨魚汎派舸艘通澧  
 公忠工功童聰翁聾  
 櫛中終夢宮衷洪彤  
 琪龔銅烘綾訶盅蒙  
 苜蓿沈々騰騰冲々  
 崆峒龍窠靈隆塾塾

蒙濛朦朧雉龍  
 雄鴻冲穹峰蟲充叢  
 蓬葑同葱松蔓衆豐  
 躬窮腫膏恫攻瘞忽  
 戎弓駟攏熊嚙駮  
 量罟蓬鉦箭筒總種  
 鶉鷲耗耗撞縱蛭蚘

童蒙頌韻 (寫本)

國立國會圖書館支部上野圖書館藏

韻がある。撰者について異論のある江談抄にも詩文に關する話が見える。

(2) 例文解説

春日遊獵、日暮宿江頭亭子。  
 三春出獵重城外。四望江山勢轉雄。逐兔馬蹄承落日。追禽鷹翻拂輕風。征船暮入連天水。明月孤懸欲曉空。不學夏王荒此事。爲思周卜遇非熊。(凌雲集)

王の詩云春日遊獵し、日暮江頭の亭子に宿す。  
 三春出でて獵す重城の外、四望の江山勢ひ轉た雄なり。兔を逐ふの馬蹄落日を承け、禽を追ふの鷹翻輕風を拂ふ。征船暮に入る天に連るの水、明月孤り懸る曉けんと欲するの空。學ばず夏王の此の事に荒みしを、爲に思ふ周卜の非熊に遇ふを。

○亭子 あづまや。○三春 孟春(一月)仲春(二月)季春(三月)の稱。○重城 帝王の居城は九重の門が有るので斯くいふ。○鷹翻 翻は羽の莖。ここでは鷹の羽といふほどの意。○征船 征はゆく。江上をゆく船。○夏王云々 夏の桀王は暴虐にして敗獵を好み、政治を怠つたため、つひに天下を失つた。○周卜 西伯(後の周の文王)は將に出獵せんとしてその獲物を卜したところ、そのうらかたに「獲る所は龍に非ず、虻に非ず、熊に非ず、罷に非ず。獲る所は霸王の輔ならん。」と出た。果